学校だより「東中だより」　都留市立東桂中学校　第１２号　令和５年９月１４日（木）発行

学校教育目標　広い視野と豊かな心を持った，
健康でたくましい生徒の育成

東中だより

具体目標
- 健康でたくましい生徒
- 人の心の痛みが分かり，思いやりのある生徒
- 進んで学び，感動できる生徒
- 規律を守り，責任を果たす生徒
- 厳しさに耐え，自ら努力する生徒

桂鮎祭 が終わりました！

去る９月８日（金）午後から９月９日（土）にかけて、生徒会最大の行事である学園祭（桂鮎祭）が行われました。１日目の午後は開祭式と文化の部、２日目は体育の部と閉祭式が開催されました。コロナ禍により小学校生活の時代から学習活動に大きな制限を受けてきた生徒たちでしたが、今回は、特に大きな制限を受けることのない、初めての学園祭となりました。

そこで、生徒たちは、「一瞬一瞬を大切に創っていく」ということと、コロナ禍から「復活させて再び始め」これから先の「礎をつくる」という意味を込めて、「瞬創（Re：スタート）」という言葉を学園祭のテーマに設定し、取り組んできました。

工夫の凝らされた装飾や展示が綺麗な会場で、このようなメッセージを込めた開祭式がまず始まり、生徒たちの志気が高まります。

その後の音楽部の発表は、全校のトップを切って行われました。日々の練習と当日の素敵な演出により、全校生徒の気持ちが一つになるものとなりました。アンコールもかかり、保護者・地域の方々も含めて、桂鮎祭の始まりにふさわしい心温まるスタートとなりました。

続いては学年発表ですが、大道具、小道具、照明、音響、衣装なども含め、どの学年も素晴らしい発表でした。

まず、１学年の発表がありましたが、『小さい「っ」が消えた日』と題する演劇と学年全生徒によるパフォーマンスがありました。日本語のひらがなにはいろいろな文字がありますが、その一文字一文字が登場人物となって、誰が一番偉いかを競いました。その中で、音のない小さな「っ」が一番ダメな存在だとレッテルを貼られ、小さな「っ」は、仲間の中から排除されてしまいました。力を落とした「っ」は、体育館の会場をふらふらと歩き回り、会場後方に倒れて消えてしまい、そのまま会場前方のステージではストーリーが続きました。その間、「っ」を演じた長田竜空さんは、誰にも見られない会場後方の床の上で、暗闇の中倒れたままの演技を続けていました。とても立派な演技でした。小さな「っ」をなくしたステージ上では、日常生活に大混乱が起こっていました。「っ」がないことによって、意志が通じ合わない、大きな誤解が生ずるといったことなどが起こり、登場人物の心の中には小さな「っ」を排除したことに後悔の念や自責の念が生まれました。登場人物はそれぞれ、どの文字にも必要な役割があり、みんな大切なものなのだということに気付くようになります。

発表の最後では、学年生徒全員で、仲間の一人一人を大切にしてこれからも学校生活を送っていくことの決意が述べられました。

次に、２学年の発表が続きました。２学年は、夏休み中に保護者や地域の皆様のご協力をいただきながら、一人一人が職場体験学習（インターンシップ）を行いました。その生徒個々の体験を学年全体の発表として一つにまとめ上げました。

発表では、勉強など面倒くさいと思い、ふとしたことで異次元の世界（働かなくても勉強しなくてもよい世界）に迷い込んだ登場人物が、学校での授業中に先生から、もう勉強などしないで遊んでいいよと言われます。そして、先生も遊びに行きます。ゲームをやり放題、好きなことをやり放題とうれしがっていた登場人物が家に帰り、母親に「お腹がすいたから何か作って」とお願いします。すると母親は、「自分も何か作るのは面倒くさいし、遊びにいく」と言って出て行ってしまうのです。

このような世界に迷い込んだ登場人物は、やがて、勉強したり働いたりすることの意味に気付いていきます。働くことは、給料を稼いで自活するためばかりでなく、その仕事自体を通して、世の中をよくしていったり役に立ったり社会を創ったりしていくことになるということに気付いていきます。最後にはとてもまとまりがあって素晴らしい学年合唱「君と歩こう」をみんなで歌い、発表を締めくくりました。

これから学年の後半に向かって生活し、来年は３年生となって自らの進路選択をして東桂中学校を巣立っていくことになる２年生が、健全で望ましい職業観や人生観、学びに向かう姿勢などを身に付けていけるよう、今回の発表を生かしていって欲しいと思います。

学年発表の最後として、３学年がステージに立ちました。先の世界大戦末期、音楽学校の元生徒で、鹿児島県南九州市知覧町の特攻隊員としてやってきた２人が、「特攻の前に是非弾かせて欲しい」と言って、今でも現存するピアノが置かれている当時の国民学校を訪ね、今生の思い出にベートーベンのピアノソナタ第１４番「月光」を弾いて立ち去っていったという話がもとになった学年発表でした。一人の特攻隊員は攻撃で散り、もう一人は戦闘機のエンジンの不調で帰還したのですが、上官にも逃げ帰ったと責められ、そのとき以来、生きていることに負い目を感じながら生きてきたということです。戦争の賛美や是非ということではなく、戦争の中で強いられることとなった人間の生活や人生を通して、「人生とはいかなるものか？」「いかに生きるべきか？」を強烈に問う、迫真の演技であったと思います。会場は水を打ったように静かで緊迫した雰囲気で、皆がステージに見入っていました。発表の最後には「生きる」を学年全員で合唱し、締めくくりました。最高学年である３年生の、これまでの学びや成長の足跡がしっかり感じられるステージでした。３月には卒業となりますが、今回の発表で学んだことを卒業後のそれぞれの人生を生きる力にしていって欲しいと思います。

２日目は、体育の部と閉祭式でした。

午前中の体育の部ですが、天気も徐々に回復し、熱中症予防にとっても比較的幸運な、少しのお湿りと気温の日になりました。多少のハプニングもあって微笑ましい雰囲気だった選手宣誓の後、学年単位の競技、学年を通した各ブロックでの競技、長縄跳び、学級対抗リレーや全校ソーランなどが行われました。競技では勝敗の結果が出ますが、お

互いを応援したり気遣ったり、一人で走る選手に学年全員が並走したりする生徒たちの姿が見られました。生徒たちの日常の学校生活を垣間見ることのできる姿であったと思います。

午後は、前日からの締めくくりとして、閉祭式が行われました。全校でこれまでの取組や準備を振り返るスライドを見たりこれまでの競技やいろいろな作品などに対する成績発表や表彰を行ったりしました。これらを通して、生徒たちは、改めて自身のこれまでの取組を振り返り、やってきたことの意味や意義を確認することができたと思います。

閉祭式の中の全校応援では、生徒全員が一体となった迫力ある素晴らしい学校文化を見せてくれました。毎日、早朝より練習していた応援団が中心となって、全校が一つになった東桂中の応援パフォーマンスの姿を、保護者・地域の方々に見ていただきました。

その後の全校合唱では、「cosmos（コスモス）」を歌い、全校応援とは異なるしっとり美しい歌声が会場に響き渡りました。「cosmos」という英語は、歌詞の中に「君も私も宇宙」という言葉があるように、「宇宙」という意味の他、「秩序」という意味もあります。この世のすべてのものや生き物、社会といった個々は、宇宙全体の秩序や法則の支配を受けています。その秩序の中で、個々は、調和してお互いにバランスを保ちながら生命を維持し、存在し、そのために常に変化し続けてきました。例えば、生命は元々微生物でしたが、進化の過程の中で、人間は人間の形に変化し続け、人間社会も、自然環境を守るために、大量消費社会から資源や自然環境を大切にする社会へと変わり続けています。肉食獣がいなければ、草食動物が増えすぎて宇宙大自然の秩序が崩れます。つまり、宇宙大自然の秩序の中にある個々が常に変わっていくということは、意識しなくとも、お互いの生命や

存在を生かし合うことで全体の秩序や調和が保たれているということになると思うのです。

学校だよりの前号や桂鮎祭の開会式でも改めて紹介しましたが、生徒会長の髙部莉愛さんは、桂鮎祭の取組を始める最初の決起集会で全校生徒に向けてこう述べました。

「今、世界では戦争や感染症で若い人も年配の方もいつ何があるかわからない予測不可能な毎日を送っています。しかし、私たちは、戦争や感染症の影響があろうとも、これから自分たちで考え、その瞬間を創りながら生きていかなければなりません。予測不可能で急速に発展する世の中だからこそ、今年の桂鮎祭や活動をつくり続けること、つくり続ける力が必要だと思います。(桂鮎祭の取組は）そのみんなの「つくる力」を鍛えるチャンスだと思います。長縄、学年種目、学年劇、ソーラン、もしかしたらうまくいかないこともあるかもしれません。しかし、ピンチはチャンスです。私たちの力を伸ばす期間と考えて、挑戦し続けましょう」

予測不可能な時代にピンチをチャンスと捉えて必要なものをつくり続け、力を伸ばし続けていくことが大切ということは、常によりよく変化し続けることが大切だということと同義です。そして人間が「よりよく変わる」ためには、「常に学び続ける」必要があります。

宇宙大自然の調和や秩序の中で個々は常に変わり続けて進化し、そのためには学び続けることが大切であるとするならば、全校合唱「cosmos」はフィナーレに相応しい全校合唱曲だったと言えるのではないでしょうか。

素晴らしい力を発揮し、見せてくれた生徒たちには、改めて「ありがとう！」の気持ちを伝えたいと思います。そして、桂鮎祭の最中に、これも繰り返し生徒たちが確認をしていましたが、今回、見て、感じて、学んだことを生かし、普段の日常生活の質を益々高め、よりよい生活、よりよい人生を送っていって欲しいと思います。

人間の心理的発達段階と学校教育活動

人間の心理的な発達段階は８から１０段階程度のいくつかに分けられるようですが、１３歳から２０歳にかけての「青年期」は、自分が自分で思う自分の姿である「自意識」と自分についての「客観的事実」との間での違いに悩んだり迷ったりし始める「葛藤」の時期であり、このような発達段階を背景に、自分自身のことやこれからの生き方について模索を始める時期と言われています。この時期の発達上の課題は、以下のようなものだと言われています。

◆人間としての生き方を踏まえる。
◆自分を見つめ、向上を図るなど自己の在り方に関する思考を発達させる。
◆社会の一員として自立した生活を営む力を育てる。
◆法やきまりの意義を理解する。

それまでの、大人の言うことを守ることで物事のありようや善悪の区別などを理解したり判断したりしていた段階から、より一層自分の内面での思考力や判断力が発達してくる時期だと言えます。他人や仲間との学び合いや一体感・連帯感、「このような人になりたい」と思える人間的モデルの存在などを通して、自分自身がどのようになりたいか、していきたいかを自問自答し、自分のありようを少しずつ確かなものにしようとします。そして２１歳以降の発達段階では、自分の考えや判断で、「自分自身の組み直し（つくり直し）」をし、大人へと成長していきます。この「自分自身の組み直し」を自らの考えと判断で行っていくためには、たくさんの「真・善・美」に触れていくことが重要です。自分や人間、社会の「真実」や「真心」、「善いこと」、「美しいこと」にたくさんであっておくことが必要です。このような経験によって２１歳以後の発達段階の課題である「自分自身の組み直し」を自らの考えと判断で行っていけるようになります。

中学校での学習活動や教育課程は、この「青年期」の発達段階に対応するように用意されています。桂鮎祭もその一つですが、今回触れた、たくさんの「真・善・美」を、着実に心の中に蓄えていって欲しいと願っています。

保護者・地域の皆様、桂鮎祭でのご支援と生徒たちへの励ましを本当にありがとうございました。